

都市と地方の新しい 交流のかたち

『五感塾』を 推進する

北村三郎さん



地域で頑張っている人の話を聞くのが最大の企業人教育になるという、北村三郎さん。
「人と情報の研究所」連絡先 URL <http://www2.shizuokanet.ne.jp> E-mail: sabu@shizuokanet.ne.jp

みながら、とてもやりがいを感じてくださったようで、また来てほしい」という感想でした。
「五感塾」は海士町としてもぜひ今後とも定期的に続けたいし、さらにいろいろな地域でも展開していったほしいと思っています」と岩本さんも語るのであった。こういう交流こそ本誌が望んでいるものである。

さて、北村三郎さんの主宰する「五感塾」とはどんなものなのか。ひと言で言えば、企業人教育だが、これまで行われている社員教育とはひと味違う。社員教育というのは、何よりも企業に役立つ人間を育成するために仕事に必要な知識、技術、技能を習得させることを目的にしている。社員教育を専門とする会社は、生産技術、生産管理、製造、原価管理、組織活性化、人事管理、秘書教育、ビジネススキルアップ、マーケティング、セールスなど、新人から経営者まであらゆる研修コースを用意している。しかし北村さんは、仕事力の前に、人間力を涵養することが大切だと思っ、て、「五感塾」を立ち上げた。

「私は昭和36年にいすゞ自動車に入社以来、退社するまでの35年間、さまざまなセクションを経験しましたが、主に教育畑を歩いてきました。社員の能力開発のために数多くの講座や講演会などを開催しました。日本の企業は成長を最大の目標にしてきましたから、効率

て付き合える友情が芽生えることを期待している。

昨年の11月、本誌が取り持つ縁ですてきな出会いがあった。122号で紹介した島根県海士町の岩本悠さんのところへ、読者で「五感塾」を主宰する東京の北村三郎さんがイオンリテール労働組合の「同志塾」の塾生18名を連れて訪ねたのである。岩本さんは3年前に、ソニーを辞めて海士町に移り、今は海士町の教育委員会で働いている。夫人の桃子さんはトヨタを辞めて、観光協会で働いて

「仕事力」 よりも 「人間力」

「かがり火」は都市と地方の交流を促進することを編集方針の一つにしているが、単に地方を旅することを推奨しているのではない。

その土地の歴史に興味を持ち、その土地に住む人たちの声に謙虚に耳を傾け、その土地の暮らしを体験することで、双方が敬意を持つ

り住んだのだが、今では海士町の地域づくりにはなくてはならぬキ

ーパーソンになった。島に暮らす人たちが何より望んでいることは、人口の流出を防ぎ、交流人口を増やして町を活性化させることだが、来てくれるなら誰でもいいというわけではない。来る側と受け入れる側のお互いにとってうれしい関係をしてくれる人の来島が望ましい。「五感塾」は、かなり良い企画だと感じました。来島した方たちが地域に入るマナーをしっかりと意識された上で「遊ぶ」というより「学ぶ」という姿勢で来られていたので、こちらも多くの刺激を受けました。また、参加者が満足してお帰りの方たちも交流を築し

主義、成果主義を達成して業績を上げる社員をつくらうとしてきましたが、ややバランスを欠いた人間をつくってしまったのではないかといい思いがあります」

平成8年、いすゞ自動車を選定退職した北村さんは、翌年、それまでの経験を生かした企業人教育を始めようと「人と情報の研究所」を設立した。

ちなみに北村さんは、定年は野球に例えていえば6回の裏だと言う。「定年後12年たって、現在、私は72歳。回は進んで、今は8回の裏というところでしょうか」

停学、退学、 そして 夜間の高校へ

北村さんが、定年後に社員教育に力を入れ始めたことを説明するには、サラリーマン時代を紹介しなければならぬ。

北村さんは1961年に早稲田大学政経学部を卒業して、いすゞ自動車に入社した。順風満帆の社会人としてのスタートに見えるが、大学に入るまでに苦い思い出がある。

「私が退学処分になるような不祥事を起こしたのは高校3年の時です。東京・日本橋の都立高校に通っていた3年生の9月の修学旅行で、最初の事件を起こしてしまいました。

修学旅行先の京都で、女子生徒が「祇園で舞妓さんを見てみたい」と言い出したのです。私はいい格好を見せたかったのでしょう、「いいよ、見せてやるよ」と太っ腹なところを見せ、男子生徒と女子生徒7人連れて祇園に行きました。

もちろん祇園のお茶屋は高校生を入れるところではありません。仕方がないので近くにあった一杯飲み屋に入って、みんなでお酒を飲んだのです。調子に乗って飲み過ぎてしまい、私と女子生徒3人がひっくり返ってしまって、タクシーで旅館に送り返されました」

東京に帰ってから大問題になり、全員が停学1週間、職員室の前の廊下に「次の者、停学1週間を命ずる」と名前が張り出された。これだけだったら、青春のほろ苦い思い出で終わっていただろう。しかし、翌月に暴力事件を起こしてしまいました。

「よくある話ですが、近くの私立高校の生徒とのいざこざでした」そのころの北村さんはインテリヤクザにあこがれ、番長を気取っていたという。頭が良くて、けんかも強いというのが最高のヒーローと思っていた。他校の生徒と一戦を交えなければならなくなった時、逃げるといふ考えはまったくなく、子分を連れて決闘場へ乗り込んだ。

「相手の高校生にけがをさせてしまいましたから、大問題になりました。職員室では、北村には前科

がある」といふ先生と、「退学させると人生がめちゃくちゃになる」と擁護してくれる先生が大激論になったようですが、最後は退学処分という結論になりました。あと5カ月で卒業という時でしたから、絶望的な気持ちになりましたよ。

余談ですが、私はそのころ腕力には自信がありました。というのには中学時代に私は北区に住んでいて、近くに世界フライ級チャンピオンになった白井義男さんが練習していた王子拳道会があつて、私はそこに通っていたんです」

白井義男は、昭和27年5月19日、後楽園特設リングで、アメリカのダド・マリノ選手を破ってチャンピオンになった。その時の日本人の興奮はオリンピックで金メダルを取った以上のものがあり、国じゅうが大騒ぎだった。白井選手にあこがれてジムに入門した北村少年は、最年少だったことから先輩ボクサーたちから「坊や」とかわいがられ、白井選手のゴングボーイを務めるようになった。

「今、ゴングは自動制御で鳴りますが、当時はストップウォッチで時間を計って鳴らすのです。私は学校から帰ると、午後3時から9時までゴングボーイとして白井選手の手を鳴らしていましたから、得意満面でした。コーチのカーン博士が指導する白井義男の練習は非公開で、窓はブラインドを下ろしてしまふのですが、私は間

近で見ることができなのです。私自身も、見よう見まねでシャドーボクシング、サンドバッグ、パンチングボールなどをたたくようになっていました」

この楽しい期間は、白井選手の滝野川の自宅に新たな練習場が完成したこと、北村さんが北区から日本橋に引っ越すことになって、間もなく終わった。しかし、ボクシングへの熱は冷めず、中学を卒業して、高校に進んだ時はボクシング部がなかった高校に学校を説得してボクシング部をつくったほどだった。これも余談だが、この時から45年後、北村さんはいすゞ自動車に白井義男さんを招いて講演をお願いしている。

会社一途の たこつぽ人間 だった

退学になっても、北村さんは捨てばちにはならなかった。「当時は、先生も親も、近所の人にも恩情がありましたね。退学になつた子どもを白い目で見る雰囲気ではありませんでした。担任の先生が私の家に来て、自分で退学届を書きなさい」と、自発的に退学するかたちにしてくれました。

退学させられたの自分退学したのとでは、それ以降の人生がまったく違ってきます。美術の先生が親身に助言してくださった

おかげで、翌年、私は夜間高校に編入することができました。夜間高校というのは昼間の高校と違って、卒業に4年かかります。私の場合、4年生に編入できれば1年で卒業できたのですが、単位の関係で3年生から入り直すことになりましたので、通算5年をかけて



海士で開催された「五感塾」では、参加者は船に乗って定置網漁業の現場も体験した。

高校を卒業したことになります」昭和20年代の夜間高校の学生は、貧しくて昼間の高校に行けない人がほとんどだった。男性は大工やコックの見習い、女性は看護師を目指すとか、タイピストやウエイトレスをやりながら学校に通っていた。昼間の学生から夜間の学生に転じた北村さんの目には、熱心に勉学に取り組む人たちが新鮮に映った。「ああ、こういう人たちもいるん

だなど目を開かされて、私の人生

観は大きく変わったと思います。私の心のどこかに、現場で働く人たちと目線を合わせて生きていきたいという気持ちが生えたと感じています」

退学処分になったおかげで、逆にいるいろいろなことを学ぶことができた」と北村さんは述懐する。

夜間高校に通い、昼は大学受験予備校に通って通算5年間の高校生活を送った後、北村さんは早稲田大学に入った。高校時代にはいい経験があったから大学に入った後は一心不乱に勉強したかというところ、必ずしもそうではないところが人生は面白い。

「当時の大学は安保闘争のさなかで、学園全体が騒然とした雰囲気でした。私は過激な学生運動に疑問を感じていましたので、授業のない時は、付近の雀荘に通ったり、時間のあるときは新宿の末広亭、上野の鈴木に通っていました。私の生涯の生活信条になったGNN、義理、人情、浪花節は学生時代に通った演芸場で身に付けたものです」

大学卒業と同時に北村さんは、いすゞ自動車に入社した。自動車が好きだからというよりも、サラリーマンになれば、どこの会社でもよかったという。しかし、最初の配属先が人事課教育係だったのが、その後の人生を決めた。

「当時、教育は花形の部署とは思われていませんでしたが、手掛け

てみるとなかなか面白い仕事だと思っようになりました。会社に入

ったからには、まじめにやらなきゃいけないと思っって一生懸命、働きました。徹頭徹尾、会社人間でした」

北村さんは順調に出世の階段を駆け上がっていった。しかし、ある年、思わぬ落とし穴にはまってしまった。

「人事課にいた時でしたが、新入社員の歓迎会をやることになった時、人事管理部門のトップである役員に声を掛けず、社長を呼んでしまったんです。その役員はまじめな人で、出席してもらっても盛り上がりがないと、うかつにも軽視してしまつたのです」

その役員にとっては耐え難い屈辱だったのだろう。それから以降は北村さんの進路が微妙にずれた。不本意な転勤がたびたびあり、本流から外れたことを意識せざるを得なくなつた。サラリーマン社会では、小さなことでも上司ににらまれたら命取りになることもある。この一件で、一途に会社に尽くしてきた北村さんの努力が水泡に帰してしまつたのである。

「ちょうど中間管理職からさらに上を目指そうという時期で、役員を狙える立場にいたものですから、目の前が真っ暗になりましたよ」

その後、太平洋アフリカ部長、北米部長、海外部品部長を歴任したが、いずれも中枢から外れてい

た。

もう一つ、北村さんが会社と正面切って激突したのは50代前半に、社長が自ら発案したTQC（総合的品質管理）活動のデミング賞挑戦に異を唱えたことである。デミング賞というのは、当時は経営改革の華やかな目玉で、大企業が競ってこれに挑戦していた。デミング賞を受賞するというのは社会的にも名譽なことだった。

しかし、これは社内の士気を阻喪させ、人間関係をズダズタにすることに気が付いた北村さんは、あの手この手を使って、デミング賞から撤退させることを画策した。社員がトップの方針に逆らうことはいかに恐ろしいことであるかは、組織にいた人ならば想像できることと思う。北村さんは深慮遠謀を巡らして、社内報の『いすゞしんぶん』で、「社長・社員のホンネ座談会」を企画し、TQCがいか

に愚かなことを暗に訴えた。作戦は成功して、社長はデミング賞挑戦を撤回したが、北村さんの出世の芽は完全に消えていた。

会社がデミング賞挑戦から撤退を決めたころ、会社では、部長を対象にリフレッシュ休暇というものが設けられた。原則は2週間の休暇だが、希望があれば最長4週間までもらえるもので、手当として10万円が支給される。この休暇は、海外旅行に行こうが、温泉で

リラククスしようが、まとまった読書に充てようが、何をしても構わないというものだった。

北村さんにその時ひらめいたのは、「あいつはどうしているかなあ」という過去の友人たちの面影だった。自分はこれだけ会社に尽くしてきたのに、出世の階段から転げ落ちてむなしさを感じている。中学・高校・大学の同級生たちの顔が浮かんだ。そうだ、彼らに会いに行ってみよう。唐突の思い付きだったが、会いたいと思う人間をリストアップした。連絡先も不明になつている友人も多くいて、連絡を取るのも困難だったが、結局66人の旧友を訪ねる旅にリフレッシュ休暇を充てることにした。

一日3〜4人のペースで会つた。その結果、北村さんがつくづく感じたことは、「会社はたこつぽである」ということだった。友人たちはアパレルや食品、新聞社などさまざまなところで働いていた。学校の先生も、共産党の幹部になつていた人もいた。キャバレーの社長やジャズピアノリストもいた。羽振りのいい人も逆境にある人もいたが、みんな必死に生きていた。いすゞという会社は北村さんにとつては大きな世界だったが、旧友を訪ねると、世界の外には広大な宇宙が広がっていることを知った。

「66人と会っていちばん感じたのは、世の中がものすごい速さで変化しているということでした」



訪れたメンバーも受け入れた地元も満足した「海士五感塾」。



複数の企業の人たちが一緒に参加した「米沢五感塾」。

観光ツアーでは知り得ない地域の表情と、伝統的文化に接することができた「阿波五感塾」。



「伊豆五感塾」では、中学校のトイレ掃除もプログラムに組み込まれた。

この旧友訪問の旅はマスコミに知られるところとなり、新聞社やビジネス雑誌が次々に取材に来るようになった。その取材に答えているうちに、自分の後半生の人生設計も見えてきた。

北村さんは、級友を訪ねる旅から戻り、自分の使命は会社の風土改革であると決めた。

「入社した時は会社に自由闊達な空気がみなぎっていたのですが、次第に官僚的になってしまったんです。アメリカ型の管理方式、成果主義が導入されてから、人間的なつながりが希薄になってしまいました。私は、今でもいすゞの社員だったことに誇りを持っていますが、若い社員やこれから入社してくる社員には、率直な意見を交わしながら、それぞれの個性を失わず伸び伸びと働いてもらいたい、そのための環境づくりが私の最後の仕事だと思おうようになっていました」

その思いを手紙に書いて、直接社長に直訴した。それが聞き入れられて、株式会社いすゞ能力開発センターに出向、社長になった。

北村さんは、家庭には家風があり、学校には校風があるように、会社には社風があると思っ

て、社風がいい会社は経営者と社員の意思の疎通も良く、それぞれが生きがいを感じて働いている。社風の悪い会社は、お互いの信頼感を喪失し、社員も経営者も結果だ

けを求めて独善的になっていく。社風の悪い会社で働くほど不幸なことではない。そのための会社の風土改革はいかにあるべきか——その時以来、定年になった今でも北村さんが追い求めているテーマである。

「私が45年間、企業人教育を体験してきたの総決算が『五感塾』ですが、まだまだ未完成です。しかし、この五感塾の思想に共感してくれる複数の企業が現れました。『イオンリテール労働組合』『帝人グループ』『新日鐵化学』『再生日本21』の4団体です」

だから厳密に言えば、現在の五感塾は、この4団体のための教育プログラムなのである。「現在はそうですが、私はもつとこのプログラムに磨きをかけて、将来は誰でも参加できるものにしたいたいと思っています。このシステムに共感した人たちはそれぞれの土地で、自由に五感塾を開催できるように発展させたいと思っています」

五感塾の最大の特徴は「異体験」——今まで体験したことのない初めての体験をすること。日常から脱却して、見たことのない現場を見ること、会ったことのない人に会うことである。そして、日本各地を訪れて地域のために貢献している人と出会うことで、気付き、アイデア、ひらめきが生まれ、想像力を育てることである。

五感塾のコンセプトの一つに、「有名無力 無名有力」というのがある。これは、地域で頑張っている無名の賢者を取材する「かがり火」の編集方針と一致するものである。無名の賢者たちの話を五感塾の塾生に聞かせたいと言っているのが北村さんの考えであった。そして、白羽の矢が立ったのが岩本さんだったというわけである。岩本さんは地元の株式会社「巡の環（めぐりのわ）」の阿部裕志さんの協力を得ながら、海士五感塾のテーマや3日間の企画内容を考え、隠岐牛の飼育者や定置網の漁労長、有機栽培に取り組んでいる農家の方や自然ガイド、隠岐神社の宮司さんなど地域の方々に講師の依頼をした。海士町の暮らしや自然、文化から、都会にはない多くのモノを学んでほしかったからである。その労力は決して小さくはなかったが、手応えのある充実した交流だったと感じていた。

北村さんは「企業人教育といっても、こんな時代ですから企業も予算がふんだんにあるというわけではありませんが、地元にもできるだけ負担を掛けなかつたで運営していきたいと思っっています。過疎の進むなかで、志を持って地域づくりに取り組んでいる人と触れることほど貴重な人材教育はありません。「かがり火」の読者の方たちの協力も切に期待しているところです」ということだった。

平野 尚の『Beauty Salon』



第1回

美容師である以上、技術の良しあしが問われるのは当然です。しかし、技術が優れていさえすればお客様に満足していただけるというものでもありません。ハサミさばき髪の動かし方など実によく好きな美容師でもお客様から好かれないうことが往々にしてあります。なぜでしょう？ 答えは簡単です。美容師はお客様に、技術以外のことも望まれているからです。理想的な美容師とは、お客様に「あなたに会えてよかった」と言っていた人だと思っ

ています。あなたがお店にいるから来るのよ」と言ってもらえる美容師だと思っ

ています。そのような美容師を育てるにはどうしたらいいかそれだけを考えて35年たちました。経営者の使命はそのような美容師が育つ環境づくりだと私は思っ

美容室「ジュノン」「ゼル」 〒184-0004 東京都小金井市本町2-6-9 チェレスタT3F TEL 042-383-2071 FAX 042-384-0962

平野 尚は「かがり火」を応援しています。